

出雲の弁慶誕生伝説と山

北川 千晶

はじめに

源義経の家臣である武蔵坊弁慶の誕生伝説は室町時代成立の『義経記』（小学館）巻第三に、

源九郎義経の御内に聞こえたる一人当千の剛の者あり。俗称を尋ぬれば、天児屋根の御苗裔、中関白道隆の後胤、熊野の別当弁せうが嫡子、西塔の武蔵坊弁慶とぞ申しける。…さて姫君は別当に従ひて、年月経る程に、別当は六十一、女房は十九と申すに、ただならずなり給ひたりければ、別当「七十になりて、子儲けんずるこそ嬉しけれ。男ならば仏法の種を継がせて、熊野をも譲るべし」とて、産所などをも世に越えてぞ拵へける。かくて月日待つ程に、限りある月には生まれず、十八月にぞ生れける。生れ落ちたる気色けしきは、世の常の二三歳ばかりにて、

髪は肩の隠るる程に生ひて、奥歯も向歯も殊に大きに、一口生ひてぞ生れたる。…

とある（一）。弁慶は、熊野三山を纏める別当弁せうの嫡子とある。父の弁せうは架空の人物である。同じく『室町物語集』下（岩波書店）所収の「弁慶物語」には、

そもそも、この武蔵坊と申は熊野の別当弁心が子なり。此弁心、いかなる前世の宿執しゆくしゅうやらん、五十の陰いに入るまで、男子なんにても女子にょにても、子といふもの一人もなし。女房もこれを嘆き、あるとき二人ながら、若一王子に七日参籠さんろう申給ひて、申子をし給ふ。七日の満じける夜の夢に、鳶とびの羽はを賜ると御覧じてより後、懐妊し給ふ。常の人は九月十月を限りとするに、この人は十月廿月ま過ぎ、三年にてぞ生れける。姿を見れば、世に越えて恐ろしく、

とある。(2)「弁慶物語」には熊野別当弁心の息子とある。弁心も弁せうと同じく架空の人物である。弁慶が生まれた時の見た目は二、三歳の子供のようであつた。既に髪や歯が生え揃つていた。『義経記』や「弁慶物語」は、共に弁慶と熊野を結び付けている。

只今、こゝもとに進み出でたる兵をば、いかなる者と思ふらん。小野篁右大臣が末孫、田辺の別当湛増が嫡子、生るゝ所は出雲の国枕木の里、育つ所は三条京極、学問するは天台山、悪魔降伏の貴僧と生れ、それ風は竜王の出し給へる息として、時の不思議をなし給ふに、退き給へ

ではなく出雲国枕木の里で生まれたという。

弁慶誕生伝説は紀伊国の熊野地方と出雲国両方にある。出雲も紀伊と同じく多くの弁慶伝説がある。そこで今回は数多くある出雲の弁慶伝説のうち、特に弁慶誕生伝説を中心に考察していきたい。

イ. 出雲の弁慶伝説と枕木山

表を見ると弁慶伝説の多くは、枕木山華藏寺(①②③)・長海町(④⑤⑥⑦)・野原町(⑧⑨⑩)・本庄町(⑪⑫)・新庄町(⑬)に散見できる。また、鰐淵寺にも弁慶伝説がある(⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳)。

特に誕生伝説は枕木山の麓にある長海にある。

長海町の「弁慶産湯の井戸」「弁慶森（水神）」野原町の「弁慶島」本庄町の「弁慶の立て石」新庄町の「刀匠定恒」は『雲陽誌』に掲載されている（5）。享保二年（一七一七）には既に知られていたことになる。

「はじめに」で引用した「四国落」によると弁慶は出雲国枕木の里で生まれたとある。枕木山は島根県松江市にあり北山山系の一部である。山中には華藏寺がある。まず枕木山とはどのような所であろうか、縁起で確認しておきたい。

枕木山について「大山寺縁起」巻上（洞明院本、年代・著者不明）には、

いっほどの事やらん、西海の波にうかべる山有り。縁起の文には漢域の東岸、碎震くづれふる而任をせ風来り流るとあるとかや。彼の山の事なり。地藏権現、山王に勅して此の山をつなぎとどむべき由ありければ、山王御弓のはずにてかきよせ給ひけり。弓の影湖水にうつりて、化しておのづからなるかなる洲と成りて、浪にうかべる彼の山を留め給ひぬ。今弓山の浜と申すは、彼の山をつなぎ留めたる州浜なり。件の山長く遠き間、出雲八重垣猶ほ濊たにひけるを、人皇第六代孝安天王三十二年庚申の歳、八雲の太神あまくだ

り給ひて、土をつかね杵をくだして、此の地に彼の山をつきしとね給ひければ、やがて此の土に基してげり。それより彼の太神を杵築大明神とぞ申しける。件の山を浮浪山と申すは此の故なり。西に鰐淵寺、金剛蔵王の霊地なり。東に枕木山、医王善逝の霊場あり。即ち胎金両部の峰にて、靈験今に新たなり。

とある（6）。西の鰐淵寺は金剛蔵王の霊地、東の枕木山は医王善逝の霊地（薬師如来）とある。枕木山は鰐淵寺と並び称される霊場であった。

次に、枕木山の歴史について見ていきたい。万治三年（一六六一）佐々木道慶が記した「枕木山縁起書」を元にしたい（7）。

出雲国島根郡ニ有枕木山一、其ノ為ル境也、松江ハ在目下ニ、大海ハ在ニ東北一、而テ南ハ望焼島、安木、意宇東崎之人烟ヲ一、北ハ見ニ隱岐国ヲ於ニ大海中ニ、東方ノ海水達ニ三保関ニ、西方ノ松江城ハ動ニ揺シ波底一、弓浜之灣勢、大山之奇秀、実ニ是ノ山之絶景也…。

抑当山ノ草創者、人皇第六代智元上人也、初メ号ニ美田ノ源太ト一、出_レ自ニ王氏一不_レ遠、曾_テ有_レ故而、放_ニ逐_セラ_レ於_ニ隱岐国ニ一、

遂ニ流ニ落^{チル}諸国ニ、赴^ム中華ニ、而段朝將^マ行^ント北国ニ、
舟中^ニ俄^ニ逢^フ風伯^ニ虐怒^ニ、黒雲蔽^レ空^ヲ四望^ニ漫々、無^レ所^ニ
見、唯雲端有^レ如^ニ山形^ノ一、源太深ク祈^リ謂^{ラク}、若^ク此山^ニ
有^{ラバ}ニ仏神^ニ、則^チ此舟可^レ著^ニ山下^ニ、若^シ然^{ラバ}則^レ必^ズ登^シ
ニ法心^ヲ一、可^レ奉^ニ香火^ヲ一、仏心有^{ラバ}レ応[、]則^レ必^シ可^シニ出^シ
テ火^ヲ爲^レ一験^ト、俄^ニ頃^{シテ}加佐浦^ニ火見^{ハル}、加佐浦者、両
方出張之洲也、源太弥^イ々默禱[、]是^レ必^ズ仏神^ノ所^ヲ爲^{ナラン}、
…山上有^レ池、今^ノ薬師尊之所^ニ座也、源太以^テ爲^ニ一奇異^ト
一、佇^{タツ}立^テ徘徊^ス、一女忽^タチ来^ル矣、源太問^テ云^ク、此山^ニ
有^ニ仏神^一乎、有^ニ居^一人^一乎、女子答^テ曰^ク此山^ハ自^ニ往古^一
無^ニ人^一来^一、今^チ爾信心深^キ故^ニ、欲^レ勞^レ以^レ事^ヲ、是^ヲ以^テ出
現矣。次^ニ一男来^ル矣、源太問^フコト如^レ初^ノ、二人同^ク答^テ
曰、我輩^ハ是^レ此山^一神也、男住^ニ此池^一、女住^ニ別池^一、溪^ニ
有^ニ薬師尊^一、我居^ニ薬師尊之上^一、故^ニ遂^ニ無^レ至^ニ仏^一化^一、
使^三爾^ヲラシ^テ薬師尊^ヲ奉^ニ山上^一、因^ニ問^ク云^ク、爾何故^ニ至^レ此乎[、]
源太語^ク曰、其故^ハ如^レ前、源太謂^テニ二人^一曰^ク、爾等先導^シ
可^レ拜^ニ薬師尊^一、二人曰、薬師座^スニ弥勒岩^ニ一、弥勒仏、
登^ニ天井^一去、薬師於^レ今在^ニ焉、欲^{セハ}レ奉^ニ請^{セント}薬師^一、
此池剎那中可^レ爲^ニ平地^一、二人導^ニ源太^{一行}、二人曰、一

白鳥可^ニ飛去^一、從^レ是^ニ可^レ行、遂^ニ至^ニ岩下^一、岩中有^ニ三尊^一、
一、其中則^レ薬師、其左^ニ日天、其右^ニ月天也。奉^ニ此三尊^一、
与^ニ二人^一同行^ニ至^ニ池边^一、俄頃大風雨、雷電、山峰崩落、
池上成^ニ平地^一、二人曰、此池号^ニ大王池^一、山後有^ニ竜王^一
池、大王池今成^ニ平地^一、龍王池長伝^ニ後世^一、爲^ニ我輩^一
二人之印^一、雖^ニ大旱魃^一而雩^{ホヒ}祭則可^レ無^レ不^レ応、是乃我
輩之靈異也、言終而、二人飛去、其所^ニ去之跡^一、於^レ今有
レ之、蛇島是也。…

源太爲^レ児時、弄^ニ一枕^一、至^レ老不^レ離^レ身、至^レ是出^レ枕
安^ニ置^ニ薬師^一、後枕化而^レ膝矣。因^レ是号^ニ枕木山^一也。
源太至^ニ叡山^一、語^ニ伝教^一、以^ニ前^ノ由^一、且^ニ請^レ發^ニ法心^一、
伝教感^ニ其志深^一、以^ニ一山之開基^一、授^ニ智元上人^一之号^一、
於^レ是勸^ニ進^ニ諸国^一建立^ニ大伽藍^一、

枕木山の草創は智元上人とある。智元上人はもともと美田
源太と称した。唐からの帰国時、北国に行こうとした時に船
が嵐に遭遇し山の形が見えた。この山が後に枕木山と呼ばれ
るようになった。源太は、比叡山へ行つて伝教大師に枕木山
での出来事を伝えた。そして智元上人の号を授かった。諸国
を勧進し、大伽藍を建立した。

さらに「枕木山縁起書」の続きを読んでいきたい。

四百余年前、靈堂將^{たいは}頽破^{たいは}、及^{たいは}此時^{たいは}、天子有^レ病、類癩^{らい}醫藥^{いやく}祈禱^{きたう}無^二寸効^一、藥師化^{くわ}客僧^{きやくそう}、詣^よ禁裏^{きんり}、謂^い云ク、天子病、醫禱可^レ無^{カラシム}驗、若取^し出雲国島根郡枕木山杉井之水^{しづみ}、煎^{せん}藥劑^{やくざい}、沐浴^{みよく}、則玉体可^レ無^{つが}恙^し。公卿奏^{そう}聞^{きこ}之^を、詔^{みこと}使^し問^と僧^{そう}、而無^レ知^レ所^レ行^レ、勅使至^{いた}出雲国^{いづも}保村^{たむけ}問^と之^を、無^レ知^レ者^し。遂^{すなは}上^あ枕木山^{まくらぎ}尋^{たず}之^を、七圀余杉木之殘根、有^二清水出^一焉。今藥師堂之側有^二此水^一、勅使酌^{しやく}此水^を、帰^{かへ}如^{ごと}僧言^{そうごん}、天子之病遂^{すなは}平復^{へいふく}、自^{より}是天子元日^{かんよく}盥浴^{くわんよく}用水^を之^を、天子於^お是建^た立^た靈堂^{れいどう}、毎年枕木山侶^{りふ}、献^{けん}上^{じやう}此水^を、然後、仏道寺^{ぶつだう}・澄水寺又上^あ之^を、天子勅^{しやく}曰^{いは}、只以^{ただ}早^{はや}来^き可^レ為^な褒賞^{ほうじやう}。枕木山ノ衆曰^い、此水ハ元来我山之所有也、可^レ無^{カラシム}他酌^{たしやく}、兩所衆曰^い、天子以^{もつ}早来^{はやき}為^な賞^{じやう}、然則曷^{なんぜ}無^{カラシム}酌^{しやく}乎、於^お是及^{いた}關争^{かんじやう}、自^{より}十二月晦^げ、至^{いた}正月三日^{にち}、仏道寺、澄水寺、同^お与^{とも}枕木^{まくらぎ}相敵^{さうてき}、死傷甚多、天子以為^{おも}天台宗好^{この}關争^{かんじやう}、自^{より}今以往^{こゝより}、可^レ為^な禪宗^{ぜんじゆう}、

かつて、枕木山には僧坊が千宇余りあった。四百余年前（二〇〇年代）になると靈堂が大破してしまった。これをま

めると次のようになる。

天皇が病にかかり勅使が枕木山の藥師堂近くにある清水を汲みに行った。天皇の病は治り、以後盥浴に用いた。毎年、枕木山の僧は清水を天皇に献上した。後に仏道寺や澄水寺の僧も清水を求めて枕木山に登った。天皇は「早く献上した者に褒賞をやる」と言った。その結果、枕木山・仏道寺・澄水寺の対立抗争となり多数の死者が出た。以後、枕木山は禪宗に改宗したという（8）。

次に枕木山と弁慶について記すのが、「中書家久公御上京日記」である。（島津）家久は京都から薩摩への帰路、日本海から九州西岸を船で南下している。天正三年（一五七五）六月二十二日の記事には、

明かたに船いたし行くに、出雲の内馬潟といへる村にて
関とられ行に、枕木山とて弁慶の住し所有、其下に大根
島とて有、

とある（9）。天正三年には既に弁慶が枕木山に住んでいたという伝説が知られていた。

更に枕木山ではどのような弁慶の伝説があるのか。『懷橘談』上「枕木」の項を見たい。

寺僧の語りけるは源家の陪臣武蔵坊弁慶は此枕木の里にて生れ当山の児たりし時同僚の児を良もすれば打擲し侍る程に院主折檻の為にあの島へ流し給ふ去程に弁慶石をひろひ集め陸へ通ふ道を造りやがて山へ帰り侍る程に今に至て弁慶島と申ならはし侍る永見と云里に弁慶が産水弁慶が母の墳墓も今に存せり父は意宇郡熊野山の人も天照太神生れ給ふ時の産水も此山にあり弁慶曙毎に此水を汲ければ弁慶水とも申ならはし侍る水を守護せるは妙見菩薩也

とある⁽¹⁰⁾。弁慶は、枕木山での修行中、乱暴を働き院主によつて島に流された。流された島を弁慶島という。永見（長海）には、弁慶の産水、弁慶の母の墳墓がある。

父は意宇郡熊野山の人と伝えている。熊野山には天照大神が生まれた時の産水がある。妙見菩薩が守護しているという。弁慶が水を汲みに来ていたとされる。

次に紹介する長海の弁慶誕生伝説では父を山伏となっている。『懷橘談』が引用する枕木山の弁慶伝説は次節で紹介する長海の弁慶誕生伝説とは少し内容が変化している。

ロ・長海のこと

枕木山の麓にある長海では、『懷橘談』より具体的に弁慶誕生伝説をみる事ができる。長海の弁慶誕生伝説の中心は長見神社である。長見神社は、『雲陽誌』が記された頃、杵田明神と称していた。瓊瓊杵尊を祀り、弁慶の産土神であったという。長見神社には「弁慶事蹟之巻」（成立年代、筆者不詳）が伝えられている。

しかしながら成立年代がはっきりしないので、『雲陽誌』巻之一島根郡長海杵田大明神の項にある「弁慶願書」を長いがそのまま引用し紹介したい⁽¹¹⁾。黒沢長尚がなぜ「弁慶事蹟之巻」を「弁慶願書」としたのかは不明である。

弁慶願書なりとてあるをみるに、弁慶九歳までは母と一所に居たりしか、村の者ともに悪まれ海中の島に捨られ音信もなかりけれども、霜雪^{そうせつ}の苦を身にも受す、ある時氷を破あなたこなたとイありきしに、いつくとも知ぬ山伏来ていひけるは、汝此島に独すむ事の哀さよ、いさむさしといふものをさしてあそはむとて、むさしの図を石に切付てさしたりといふ、思に今の世に小童の戯にむさしをさすといふは武蔵坊かさしたるゆへに此戯をむさし

といふならん、彼山伏語けるは我は是汝か父の天狗なり、
陸へ渡す事は安けれども末世の人見懲しめんためなり、
是より西の面に道を作れといひて空中にかへりぬ、十歳
の年袖や裳もふせに砂を入れて道をつくる産神も憐給ふにや、南
北の波ゆりたつといへとも砂も崩す程なく道を作て渡
り、枕木山・長永寺・鰐淵寺此三の山を廻て学問をなす、
十五歳になり長海の新庄小谷村成相鍛冶に鉄一駄片荷し
て長刀をあつらへ、三年三月にうちたり、千日に出来た
る剣なれはかねの心を知ために金床を切に少もたまら
ず、切たり、かくのことくの鍛冶を置ならは又かやうの
太刀をうつへしとおもひ、つゐに鍛冶を斬殺ぬ、さて修
行をせんとおもふ處に母病をうけて最後ちかくなりし
時、我を呼ていひけるは汝よく聞母は紀伊国田那部の誕
象が子なり、彼誕象子なきによつて熊野権現にいのり我
をもうけたり、大治三年戊申五月十五日に生弁吉と名つ
けぬ、我容世にすくれ、醜みにくによりて年二十になるまで
夫なし、父母是を悲て出雲国結の神に祈誓し参詣をなさ
しむ、久安三年丁卯六月朔日に生国を出、其時父母のい
へるは汝夫なくは此国へ帰へらすとあり、夫より出雲の

国くにに來結の神へ参詣して七日七夜通夜をしたり、七日に
満る夜の夢に汝に結夫なし、其故は汝か父は殺生偷盜を
なし、母は又垢穢くえ不淨の身を嫌す、権現へ参詣し叶さる
子を願ねがよりて容醜かたみにく生たり、されとも遙々参詣したる験
しに縁を結て得させむ、島根郡枕木山の麓に長海村とい
ふ所あり、其所へ行七年棲すむならは夫を得させむとありけ
るにより、教にまかせ長海村に行て三年棲けれとも父母
のおとつれもなく、春は野に出て蕨を折、秋は荻田の落
穂ひろいを拾露の命をつなきける、暮春ぼしゅんに山に入て蕨わらびを折し
時、歳の比二十計の山伏身を粧飾よそおい來て歌に、
我は是出雲の神の結にて汝を妻と定りそする
我返歌に
うつたかき身をかさりたる山伏のわらはを妻とあるはそ
らこと
其時誠に思当たり結の神の御教の夫ならめとよろこひ
おもふ、彼山伏桃の花を一枝たまはり百世の契そといひ
て空中に帰ぬ、されは程なく懐胎してつはりに鉄を好、
鋏をかくし取て九具くひぬ、十具の時里の童に見あらは
され半分食殘、是によりて汝常の人にちかひ十三月にて

仁平辛未三月三日に髪長生齒は二重にはへて生ぬ、左の肩には摩利支天右の肩には大天狗と文字あり、面の色黒して惣身は鉄なり、されとも鉄を少食残たるにや只吭四寸四方はかり人間の膚なり、即うふ湯をひかんとしたりけるか実に汝は人間の子に替たれば、常の水にてはかなはしとおもひ、自手にて井を掘水を汲て生浮湯とせり、懷胎の時多の鉄を食たるにより其恩を報ために、手にて井をは掘たるなり、末の世までも此井に鉄をは入へからす、我汝を生て飲のあまりに名をは弁慶とい付たり、又汝を島に放やりしは村の者ともに悪しによりてなり、今成仁することのうれしさよ我菩提を志は紀伊国に行誕象一門を尋よ、汝か父は天狗なれば氏も系図も知す、武士とならば田那部と名乗法師とならば武蔵坊と名付へしといひて仁安二年丁亥五月五日に死たり、弁慶母の遺言にまかせ紀伊国を尋諸国を修行せむと思立て、先氏神杵田明神に参詣す、抑当社明神は地神三代の神天彦火々瓊々杵尊にて、国土を守衆民を恵、此御笠山に跡を垂たまひしより以来今にいたりて神光四方にかゝやきたり、我父は天狗なりといへとも母は誕象か子権現の分身ともいは

むか、しからは我天下に甲たるの高名を授たまへと深誓願をなし、仁安三年戊子三月上旬に社を建立し伏拝をなし此国をぞ出にける、此一通雲州島根郡枕木之保内長海村杵田明神の社中にて書置者也と奥書あり、本書は永祿五年毛利元就所望したまひ写を社内に籠られ、今にあり、辞いやしくあやしき事のみ記たれとも、社司のいひつたふるにまかせ此に書侍ぬ、

とある。「弁慶願書」は、『義経記』と「弁慶物語」と比べるとかなり様相が異なっている。しかし、ともに異常出生譚が共通である。

長海独自の伝説として母弁吉の話がある。紀州田那部の誕象の娘であつた弁吉が長海で天狗（山伏）と結ばれた。弁吉が妊娠中に鉄鋏を食べて生まれたのが弁慶であつた。生まれてきた弁慶は、全身が鉄でできていた。喉のみ人間の皮膚であつた⁽¹²⁾。左肩には摩利支天（武士の守り本尊）、右肩には大天狗という文字があつた。常の人ではないので弁吉自ら手で井戸を掘り産湯とした。妊娠した時、たくさんの鉄鋏を食べたので手で井戸を掘つたという。

他にも弁慶の父について「弁慶願書」には天狗（山伏）と

ある。弁慶島（亀島）の伝説も長海独自である。

以上が長海に伝わる弁慶誕生伝説である。長海の伝説は、『義経記』に全く記されていない独自の伝説である。では次に鰐淵寺に伝わる弁慶伝説について紹介したい。

ハ・鰐淵寺のこと

鰐淵寺は現在の出雲市別所町に位置する。平安時代になると修験道の霊地として全国的に知られるようになった。鰐淵寺は出雲における蔵王信仰の拠点であった。まず鰐淵寺の概観について『雲陽誌』巻之九楯縫郡鰐淵寺の項から引用すると、

天台宗浮浪山一乗院といふ、夫此寺は人王三十四代推古天皇の勅願智春上人開基の霊場にして、しかも伝教大師唐国に渡天台宗を稟給ひ延暦寺草創の時末寺最初の第一なり、智春上人勅をうけたまはり鴻基を闢薬師観音の両像を根本堂に安置してより、法華三昧堂常行堂馬頭堂開山堂仁王門蔵王権現摩多羅神日吉山王祇園菅神小守勝手明神三十八社綿々として末世の今に残れり、古は堂舎坊宇都て三千余ありしに、度々の兵乱に焼亡して今は僅に

十二坊あり、

とある（13）。鰐淵寺は延暦寺草創時の第一の末寺であった。元々、堂舎坊宇が三千余りある大規模寺院であった。兵乱により僅か十二坊しかのこっていないという。

鰐淵寺と弁慶の関わりはどのようなものが伝わっているのか。根本堂には弁慶が鳥取県の大山寺（倉吉市の大日寺とも伝わる）から運んできた鐘と「弁慶清水」が伝わる。他にも「弁慶の袂石」や「弁慶の負い櫃」「弁慶の自画像」などがある（14）。

さらに『雲陽誌』巻之九鰐淵寺の項には、

本堂の傍に井あり昔西塔弁慶島根郡魔添山に生まれ、異人の教を受けて稚時より此山にのほり、終に髪を剃り瑜伽の密水に結し井なりとて弁慶水とも手習水ともいへり、弁慶か縁にや源義経より当寺の衆徒中への状あり、弁慶か自筆なり、此書は毛利輝元所望し給ひ佐世石見守か取次したりし状あり、

とある（15）。弁慶が魔添山生れとなっている。『雲陽誌』には魔添山について『風土記』に載る伊奈阿気社なるべきかとある。伊奈阿気社は現在の美保関町北浦にある。

鰐淵寺には弁慶自筆の書物が伝わるという。毛利輝元が所望し佐世石見守が取り次いだという。この書状について『鰐淵寺文書』「佐世元嘉書状」に以下のようにある⁽¹⁶⁾。

急度申候、当寺ニ義経・弁慶書物在之之由候、殿様より御用之由候条、爰許まで可被差越候、其外西行書物、何も古筆之物候は、可有御進上之候、方角所持方候は、是又承候は、可申達候、恐々謹言、

正月廿四日 元嘉（花押）

鰐淵寺

年行事

和 multifaceted坊^{（栄茂）}

佐世元嘉から和多坊に宛てている。毛利輝元が義経・弁慶と西行の書を所望しているので送って欲しいという文書である。

他にも『鰐淵寺文書』の中には、弁慶に関する文書が「左衛門尉佐々木某書状写」として残っている⁽¹⁷⁾。

また、作者・成立年代未詳の『後太平記』下巻の巻第四〇「山中鹿之助品川狼助勝負之事」によると、鰐淵寺の麓には武蔵坊弁慶が育ったという屋敷があったとしている⁽¹⁸⁾。ま

た、『島根県口碑伝説集』鰐淵寺の項には、長海と共通する弁慶と鍛冶屋の伝説について記されている⁽¹⁹⁾。

以上が鰐淵寺に伝わる弁慶伝説である。両寺院の違いについて考えたい。天長二年（八二五）に最澄の嗣智元長海によって開創された天台宗寺院が枕木山であった。一方の鰐淵寺は、推古天皇の勅願智春上人開基の霊場である。延暦寺草創時の末寺最初の第一と伝えている。

枕木山・長海周辺の弁慶伝説と鰐淵寺で語られる弁慶伝説を比較すると、枕木山・長海周辺は弁慶が生まれ育った地という伝説が多い。枕木山・長海周辺では弁慶の誕生と子供時代を中心伝えていいる。対する鰐淵寺では「弁慶の引き摺り鐘」「負い櫃」のように、弁慶が修行した地であることを伝えている。弁慶が育った屋敷があったと伝え実在したようになっている。

「弁慶の引き摺り鐘」のように『島根県口碑伝説集』にあつて『懐橘談』や『雲陽誌』に載っていない伝説もある。⁽²⁰⁾

二、長海の弁慶誕生伝説

最後になぜ長海に弁慶誕生伝説があるのか理由を考えた

い。まず、長海が交通の要衝に立地することである。

長見神社の背後には森がある。地元の方々は弁慶森と呼んでいる。弁慶森の中には弁吉を祀る祠がある。地元の方々は弁吉女霊社と呼んでいる。弁吉女霊社のそばには畑がある。畑の中に弁慶の立て石がある。地元の方に伺うと「弁慶の立て石は千酌湾へ出る旧道の印と伝わる。現在は畑になっているが、弁慶の立て石を直進すると千酌湾に着く。千酌湾から隠岐へ渡った。」と御教示頂いた⁽²¹⁾。千酌の浜について『出雲国風土記』嶋根の郡によると、

千酌^{ちくみ}の浜。広さ一里六十歩^{あし}なり。東に松林^{まはやし}あり、南の方に駅家^{おほり}、北の方に百姓^{おほりのみ}の家あり。郡家^{ひむがきた}の東北^{こほり}のかた一十九里三十歩^{あし}なり。此は則ち謂はゆる隠岐の国に渡る津是なり。

とある⁽²²⁾。『八束郡誌』第二十七章千酌村「千酌の駅址」によると、

『出雲風土記』に見えたる千酌ノ駅は大字千酌字垣の内にあつて、是より西北二町許の處に水駅があつたのである。千酌の駅は王朝時代に於ける、隠岐国と交通の要津

(である) …

とある⁽²³⁾。千酌駅は、出雲国と隠岐国の連絡路であつた。この連絡路に行く道標が弁慶の立て岩という。

『雲陽誌』が刊行された享保二年(一七一七)には長海周辺が栄えていた様子が伺える。長海の南に位置する本庄は賑やかな町場であつた。本庄には熊野三所権現がある。『雲陽誌』によると、

伊弉冊^{いざなみ}尊速玉男命事解男命三神なり、…祭礼正月十一日百手の神事として社司的^いを射儀式あり、七月十八日は御幸として本社より八町はかり経て海辺に御旅所あり、神輿を本社の前に立置、司官大幣^{おほひ}を捧祝詞あり夫より氏子とも供奉の行列なり、十八人は幣^ひを持十人はのほりを持、裸の警固^{けいこ}としてはたかになりて警固するなり、紺屋はたとて竹を十文字にゆひ、布にてまき、旗となすなり、是は古来より紺屋の役にて出すゆへに紺屋旗といふなり、競馬おはりて御幸なり、御旅所にては先潮を汲て祝詞神楽神事畢て神輿を本社へいれたてまつり、神前にて児童十八人花笠を着て神事の躍相撲あり、近村より来あつまる者おゝし、

とある⁽²⁴⁾。本庄の熊野三所権現は伊弉冊尊・速玉男尊・事解

男尊を祀る。本庄はとても栄えた場所であつた。熊野神社には紺屋旗こうやの行列がある。中海に御旅所があるという。競馬や相撲も行われた。近村からたくさんの人々が集まつて来た。

さらに、『雲陽誌』新庄の鍛冶床の項によると、

古老のいへるは西塔弁慶此谷にて定恒といふ鍛冶に太刀をうたせり、三年三月にうち仕舞たりといふ、さもあらたきにや、今に此谷に少なくすあり

とある⁽²⁵⁾。新庄は刀鍛冶の定恒が住んでいたと伝わる。先の「弁慶願書」には、

十五歳になり長海の新庄小谷村成相鍛冶に鉄一駄片荷して長刀をあつらへ、三年三月みとしみつきにうちたり、千日に出来たる剣なれはかねの心を知ために金床を切に少もたまらず、切たり、かくのことくの鍛冶を置ならは又かやうの太刀をうつへしとおもひ、つゐに鍛冶を斬殺ころしぬ、

とあつた⁽²⁶⁾。十五歳になつた弁慶は、定恒の所で長刀を誂えたという。同様の太刀を作られては困るため定恒を斬殺した。新庄には「刀工定恒の墓」がある。また、新庄には久良弥神社がある。久良弥神社の案内板には鉱工業・商業・風を司る速都牟自別神はやつむじわけを祀るとある。新庄について地元の方に伺

うと、「定恒の墓の付近から砂鉄が取れた。本庄町には鍛冶屋小路という地名があり鍛冶屋が多く住んでいた。新庄には鍛冶屋小路という屋号があつた。本庄や新庄には鍛冶屋が多く住んでいた。」と御教示頂いた⁽²⁷⁾。新庄だけでなく本庄にも鍛冶屋が住んでいたという。

長海に弁慶誕生伝説がある次の理由は、長海の人々が弁慶誕生伝説を主張することで枕木山や長海が熊野信仰の中心地であることを主張したことにある。

長見神社について「弁慶願書」の奥書は、

抑当社明神は地神三代の神天彦火々瓊々杵尊にて、国土を守衆民を恵、此御笠山に跡を垂たまひしより以来今にいたりて神光四方にかゝやきたり、我父は天狗なりといへとも母は誕生か子権現の分身ともいはむか、しからは我天下に申たるの高名を授たまへと深誓願をなし、仁安三年戊子三月上旬に社を建立し伏拝をなし此国をぞ出にける

とある⁽²⁸⁾。この奥書は、長見神社の靈験を弁慶誕生伝説と絡めて主張する文章ではないだろうか。

「弁吉は悪阻の時に鉄鋏を食べた。生まれてきた弁慶は喉

以外全身が鉄であった。」この弁慶誕生伝説をもとに長見神社も鍛冶屋からの信仰を取り込もうとしなのではないだろうか。弁吉を祀る弁吉女霊社について地元の方に伺うと「弁慶のようにたくましい子供が生まれるように近隣からたくさん参拝があった。弁吉女霊社の周りには木製の薙刀を並べ安産祈願をした。昔、弁吉女霊社の右隣には二間四方の御籠堂があった。祭礼時の休息や安産祈願の女性の宿であった。遠方からも妊婦や家族が来られた」とご教示頂いた⁽²⁹⁾。本庄の熊野神社と同じく、長見神社も多くの人で賑わっていた。近村に住む人々は本庄の熊野三所権現に参詣し、或いは長見神社の弁吉女霊社で安産祈願をした。

さらに、熊野との関係を考えたい。意宇郡の熊野大社と紀伊の本宮大社は『延喜式神名帳』に熊野坐神社とある⁽³⁰⁾。同系の神社であると考えられる。同じく『延喜式神名帳』には長見神社の名前もある⁽³¹⁾。しかし本庄の熊野神社は『延喜式神名帳』に記されていない。熊野神社は式外^{しきげ}の社であると考えられる。枕木町にも熊野神社があるが『雲陽誌』卷之一島根郡別所枕木の項に「熊野権現」とあるのみで詳細は全く不明である⁽³²⁾。

『類聚三代格』によると、出雲国造は慶雲三年（七〇六）以来、延暦十七年（七九八）まで意宇郡司（大領）を兼帯していた。『島根県の地名』（平凡社、一四〇頁上段）によると、「古代律令制の下においては国造出雲氏が熊野・杵築両大社の祭祀を兼ねたことにより、熊野大社は杵築社よりも上位に位置づけられた」とある。しかし、『類聚三代格』巻第七にある延暦十七（七九八）年三月二十九日の太政官符をもって兼帯禁止となった⁽³³⁾。すると出雲国造は杵築大社（後の出雲大社）に移住した。国造移住に伴い熊野大社は衰退した。「四国落」にある「（弁慶が）田辺の別当湛増が嫡子、生るゝ所は出雲の国枕木の里」という一文は弁慶と熊野別当湛増を結び付けることで出雲国内の熊野の勢力回復を目指したのではないだろうか⁽³⁴⁾。弁慶の母弁吉は紀伊の田那部の誕生象の娘という。田那部から長海へ来て弁慶を産んだ。意宇郡の熊野大社衰退後、長海は弁慶の父母の伝説をもって熊野信仰を受け入れたのであろうか。

『懷橘談』には弁慶について「父は意宇郡熊野山の人也」とある。『雲陽誌』卷之三意宇郡くまの山の項には、

熊野大神の社まします、檜檀有と【風土記】に見えたり、

今は売炭ばいたんの翁おゝし、

とある⁽³⁵⁾。炭は鉄を加工する燃料となる。鉄身の弁慶と熊野山の売炭の翁は関わりがあるのではないだろうか。熊野大社配布の案内本には、

標高六百メートルの天狗山は、島根県松江市八雲町と安来市広瀬町との境に位置する、このあたりで最も高い山である。この山は、「熊野山」とか「熊成峰くまなりのみね」と呼ばれ、

現在の名前の「天狗山」も、もともと「天宮山」と書かれていたのではないかといわれている。この天狗山にまつられていた神を、麓に迎えておまつりしたのが熊野大社である。

とある⁽³⁶⁾。現在、熊野山は天狗山となっている。熊野大社の元宮である。

長海の北には山伏がいた枕木山がある。枕木町には熊野神社がある。南には本庄の熊野三所権現がある。枕木山は『大山寺縁起』にあるように鰐淵寺と並び称される山である。長海からさらに北上すると諸手船神事で有名な美保神社がある。諸手船は熊野由来の權伝馬のようである⁽³⁷⁾。長海は大変賑やかな場所であった。そこに有名な弁慶の誕生伝説を作

ることで知名度を上げ熊野・鍛冶・安産など信仰の中心地として盛り立てようとしたのではないだろうか。

長海と熊野大社の関係は今後の課題にしたい。同じく枕木山と熊野、枕木山と長海の関係も今後の課題である。

【註】

(1)『義経記』(梶原正昭校注、『新編日本古典文学全集六二』、小学館、二〇〇〇年一月刊)。

(2)『室町物語集』下(市古貞次他校注、『新日本古典文学大系五五』、岩波書店、一九九二年四月刊)。

(3)『舞の本』(麻原美子・北原保雄校注、『新日本古典文学大系五九』、岩波書店、一九九四年七月刊)。

(4) 紀伊の熊野地方では、田辺の熊野別当湛増子孫を称する目良氏・那智大社実報院社家の米良氏・新宮の鈴木氏(熊野三党)と産屋敷氏がそれぞれ弁慶の子孫と主張している。しかし今のところ出雲では弁慶の子孫と称する家は見つからない。

(5) 黒沢長尚『雲陽誌』(『大日本地誌大系四二』、雄山閣、一九七一年十月刊)、『島根県の地名』(平凡社、一九九五年刊)

の文献解題によると、『雲陽誌』は享保二年（一七一七）に成立した。松江藩主松平家三代綱近の命で出雲国中の調査が始まった。綱近死去により一時中断した。五代藩主宣維が黒沢長尚に命じて編纂を完成させた。

（6）五来重編『山岳宗教史研究叢書一八 修験道史料集Ⅱ 西日本編』（名著出版、一九八四年十二月刊）。

（7）（註6）に同じ。

（8）（註6）に同じ。枕木山には次のような天狗の伝説もある。
『枕木山縁起書』の続きを引用したい。

故以東福寺住、聖一圓爾高弟、仏智禪師、居之、山上有天狗、登樓叩鐘、人有焉則或捫而走虚空、或捉而掛樹梢、禪師愁之、自登叩鐘、天狗来而欲捫之、禪師取松子払之、故寇人、天狗曰、然則自今以後、可無来此山之八分上、禪師於是解縛、天狗遂飛去隱岐国、此山居人夢天狗曰、無祭我則可為寇、衆畏祭之、至今毎年二月十七日、使巫祝祭彼天狗、

（9）箭内健次編纂『近世初頭九州紀行記集』（九州大学文学部九州文化史研究所内九州史料刊行会、一九六七年九月刊）。

（10）黒沢石斎『懷橘談』（国書刊行会編纂『続々群書類従第九』、

一九六九年十一月刊）。『島根県の地名』（平凡社）の文献解題によると、『懷橘談』は上巻が承応二年（一六五三）、下巻が寛文元年（一六六一）に成立した。著者の黒沢石斎は松江藩主松平家初代直政に林羅山の推挙によって仕えた。初入国する時、出雲各地を巡り見聞した記録を江戸に住む母に贈ったもの。「出雲国風土記」の形式に倣い風土記以来初の出雲国地誌である。

（11）（註5）と同じ。

（12）（註1）と同じ。

弁慶の身体が黒い理由について、『義経記』によると、「六歳と申しける時、疱瘡（もがき）と言ふものをして、いとど色も黒く、髪は生まれつきのままにてあれば、肩より下へは生ひざりけり」とある。六歳の時、疱瘡になり肌の色が黒く髪は生まれつきのまま肩から下に生えなかったという。

（13）（註5）と同じ。

（14）島根県教育会編『島根県口碑伝説集』（歴史図書社版、一九七九年二月刊）簸川郡、四四〇四八頁、復刊の辞によると、島根県教育会が大正七年から十年余りの歳月を費やして昭和二年に刊行したもの、とある。鰐淵寺に残る弁慶の

遺物について、『島根県口碑伝説集』（四八頁）には以下のようにある。「弁慶の遺物として鰐淵寺に残ったものは、負櫃一、鋸一、自画像一枚あり。又根本堂の後方には弁慶水がある。弁慶の自画像と云ふのは、安宅関に勸進帳を読む図である。当時弁慶が出鱈目に読んだのは、鰐淵寺仁王門建立の時の勸進文を諳んじて居りて、之を早速の機智に応用したのであると。」

（15）（註5）と同じ。

魔添山について、『雲陽誌』卷一島根郡北浦魔添明神には、「社四尺四方南向、祭礼十月十八日なり、【風土記】に載る伊奈阿気社なるへきか、」とある。さらに魔那枯山の項には「此山魔添明神の社の後にあり、始は此明神の祠山頭にありしに、海上を通船をとかめ給へり、或時九州の船通しに難に遇て此神に祈願し、後に九州より船に土を積来今の宮地に社を建立したりといひつたふ西塔の弁慶か母弁吉此山へ毎日蔵を取にきたり、」とある。伊奈阿気社について『出雲国風土記』嶋根の郡の頭注には「美保関町北浦。天御中主あめのみなかぬしの神他」とある。

（16）鰐淵寺文書研究会編『出雲鰐淵寺文書』（法蔵館、二〇一

五年八月刊）。

（17）（註16）と同じ。「左衛門尉佐々木某書状写」（四〇頁）には次のようにある。

「源義経御書（包紙押紙） 弁慶手 跡写 一」

「義経御書ノ写（端裏書） 弁慶手、跡也、」

「九十四代 花園院 将軍守邦御代④」

当寺本堂并塔婆造」宮之間事、曩祖願主之」条、無子細候上者、材木等」事、可令奉加候、

且於一」族方可致合力之由、可伝」申候也、恐々謹言、

三月廿七日 左衛門少尉御判

鰐淵寺衆徒御中

（18）『後太平記』下、巻第四〇（早稲田大学出版部編集兼発行、一九二八年七月刊）。一二三〜一二四頁。

（19）（註14）と同じ。「鰐山と弁慶」の項には次のようにある。
「昔大字別所に弁慶の叔父が居て、鍛冶を業とした。（元からの平鍛冶で無く、或る事情の為め世を忍び、此處に来つたものとか云ふ）弁慶は或時、叔父に薙刀を依頼した。叔父は三年の歳月を費し、剃刀の廃物を集め、一振の薙刀を作り、且つ一個の鉄丸を作り、炉辺に置き、弁慶の来るを

見て試みに之を切らしむ鉄丸は忽ち両断せられた。弁慶は「こんなに能く切れる薙刀を誰でも作り与ふか」と尋ねた。叔父は「商売なれば注文さへあれば作る」と云つた。弁慶は自分より他に斯かるよき薙刀を持つ人のあることを惜しんだが、突然薙刀を以て叔父を両断した。そして彼れは逃れて京に上り、五条橋で、牛若丸に追従したと。」鰐淵寺には「鰐淵鉦山」があるが、刀鍛冶と弁慶伝説の関係については今後の課題としたい。

(20)「弁慶願書」には弁慶が修行した寺について枕木山、長永寺、鰐淵寺、とある。長永寺の詳細は不明である。『義経記』によると、弁慶が修行した山の一つに比叡山がある。巻第三「弁慶生まるる事」には以下のようにある。「桜本にて学問する程に、精も月日に従ひて人に勝れて、学問も世に越えて器量あり。されば衆徒も、「容貌はいかにも悪かれ、学問こそ大切なれ」。かくてだに学問に心入るならば、山王大師の御宝とて、十八の歳までは学問にはよかりけり。力も強く骨太なり。中童子、小法師ばらを語らひて、人も行はぬ深山の後ろ、山の奥などに籠り居て、腕取、腕押、相撲などをぞ好みける。衆徒この事を聞きて、「我が身こそ徒ら

者にならばなれ、人のもとに学問する者をさへに賺し出だして不調になす事不思議なり」とて、僧正のもとに訴訟の絶え止む隙もなし。かくて訴へけるものをば時の敵の様に思ひて、その人の坊へ走り入りて、葎妻戸を散々に打ち破りけれども、悪事も武勇も鎮むべき様ぞなき。その故は、父は熊野の別当なり。養父は山の井殿、祖父は二位大納言、師の御坊は三千坊の学頭の稚児にてある間、手を指してはよき事あるまじき間、ただ打ち任せてぞ狂はせける。されば相手は替はれども、鬼若は替はらず、諍ひ絶え止む時もなし。拳を握り人をゑめければ、人道をも直に行き会はず、偶々会ふ者も、道を避けなどしければ、その時は相違なく通して、後に会ひたる時取つて押さへて、「さもあれ過ぎ候ひし頃、行き会ひ参らせて候ふに、道を避けられ候ひしは、何の遺恨にて候ひけるぞ」と問ひければ、恐ろしきに、膝ふるひなどするものをば、腕振ぢ損じ、拳をもてこは腕押し損じなどする間、僧正の稚児なりとも、山の大事にてある上は、院宣を申して山上を追ひ出し申せとて、大衆三百人、院の御所へ参じて訴へ申しければ、「それ程の僻事の者をば、急ぎ追ひ出だせ」と言ふ院宣なりければ、大衆喜び

て山上に帰る所に、公卿僉議ありて古き日記を見給へば、
「六十一年に山上にかかる不思議の者出で来つれば、朝家の御祈禱になることあり。院宣なりともこれを鎮めつれば、一日が内に天下無双の御願五十四所滅ぶべし」と言ふ事あり。「今年六十一年に相当たり候ふに、ただ捨て置け」とぞ仰せ下されける。」

また続きの「弁慶山門を出る事」には次のようにある。「鬼若これを聞きて、頼みたる師の御坊にもか様に思はれんには、山上にありても詮なし。目にも見えざらん方へ行かんと思ひ立ちて出でけるが、かくて何処にても山門の鬼若とこそ言はれんずれ。学文に不足なし。法師になりてこそ行かめと思ひて、剃刀、衣取り添へて、美作の注記と言ふ者の湯殿に走り入り、押し剃りにしたりけるが、水に影を写して見ければ、首はをかくぞ見えける。かくて叶はじとて、戒名をば何とか言はしましと思ひけるが、昔比叡の山に悪を好む者ありけるが、西塔の武蔵坊とぞ申しける。廿一にて悪事をし初めて、六十一にて死ににけるが、端坐合掌して往生を遂げたりけると聞けば、剛になる事もこそあれ。我も西塔の武蔵坊と言ふべし。実名は、父の別当は弁

せうと名乗られしぞかし、師の御坊はくわん慶なれば、弁せうの弁をとり、くわん慶の慶を取りて、弁慶とぞ名乗れる。昨日までは鬼若、今日はいつしか武蔵坊弁慶とぞ申しける。」

(21) 二〇一六年七月十六日調査。

(22) 『風土記』(『新編日本古典文学全集五』植垣節也校注訳、小学館、一九九七年十月刊)。

(23) 『八束郡誌』総説・町村誌編(奥原福市編纂、臨川書店、一九二六年十月刊)。

(24) (註5) と同じ。

(25) (註5) と同じ。

(26) (註5) と同じ。

(27) (註21) と同じ。

(28) (註5) と同じ。

(29) 長海で弁慶伝説を研究されている市川節子氏の御教示によると、「毎年七月一日には「弁吉女霊社祭」(起源不明)

が行われる。弁吉の祠の真ん中には三方に乗せられた御神酒、米などが供えられる。祠の横には木製の薙刀が立てかけられている。薙刀は、安産を願い生まれ出る子が弁慶の

- ように健やかな子でありますようにと願いを込めて父や家族の方が作って供える。」と伺った。

- 出雲国の神社について神名帳考五卷冬上には「出雲国一百八十七座大座小座八十五座」とある。意宇郡には「意宇郡四十八座大座小座四十座」とある。

- (31) 嶋根郡の項に次のようにある。「嶋根郡十四座」並小「長見神社○長海村、○長見川、風、」

- (32) 『雲陽誌』卷之一 島根郡別所枕木の項に「熊野権現」とのみある。

- (33) 『新修島根県史』史料編(一) 古代・中世(島根県編、臨川書店、一九六六年三月刊)。

類聚三代格卷第七

(郡司事)

太政官符

応任出雲国意宇郡大領事

右被大納言從三位神王宣稱、奉勅、昔者国造郡領職員

有別、各守其任不敢違越、慶雲三年以來令国造帶郡領、寄言神事動廢公務、雖則有闕怠而不加刑罰、乃有私門日益不利公家、民之父母還為巨蠹、自今以後、宜改旧例国造郡領分職任之、

延曆十七年三月廿九日

- (34) 熊野別当湛増については次の研究に詳細がある。阪本敏行著『熊野三山と熊野別当』（清文堂、二〇〇五年八月刊）。

湛増については阪本氏は次のように述べている。「熊野別当湛増は、中世前期の紀伊を代表する人物の一人で、全国に多くの庄園や所領を持つ庄園領主としての熊野三山と、その現地統括者および地方権門・在地領主としての熊野別当家、さらには武力としての熊野水軍の名を全国的に広めた人物である。湛増個人の所領・所職として現在確認されているものは、上総国畔蒜庄地頭職、紀伊国南部庄下司職、駿河国足洗庄、越前国脇本庄などであるが、これ以外にもいくつかあったかもしれない。」

- (35) (註5) と同じ。

- (36)『熊野大社』(平成二年十月初版発行)。意宇郡(現在の松江市八雲町熊野)にある熊野大社で配布。

(37) 田中久夫「熊野の船と權伝馬」『田中久夫歴史民俗学論集二 海の豪族と湊と』、岩田書院、二〇一二年十二月刊。

番号	場所	聞き取り（二〇一六年七月十六日調査）	出典の内容	出典
1	松江市 枕木山		【枕木】寺僧の語りけるは、源家の陪臣武藏坊辨慶は此枕木の里にて生まれ當山の兒たりし時同僚の兒を良もすれば打擲し侍る程に院主折檻の爲にあの島へ流し給ふ去程に辨慶石をひろひ集め陸へ通ふ道を造りやがて山へ歸り侍る程に今に至て辨慶島と申ならはし侍る永見と云里に辨慶が母の墳墓も今に存せり父は意宇郡熊野山の人也天照太神生まれ給ふ時の産水も此山にあり辨慶曙毎に此水を汲ければ辨慶水とも申ならはし侍る水を守護せるは妙見菩薩也人恐て常にはまいり侍らず	『懷橘談』上巻
2	松江市 枕木山	長見神社と弁慶森入り口のなかほどあたりの畑の中に立っている。また、枕木山第一、第二展望台の間あたりと手角地区の畑にも存在している。	（亀島から）再び長海の家に戻った弁慶だが、更なる修行を行おうと枕木山華藏寺、福原の澄水寺、平田の鰐淵寺などを渡り歩いた。枕木山には展望台下にある滝観音跡に、「弁慶の立石」として持ち運んだ高さ二メートル以上の巨石がのこされている。	海と山に抱かれた本庄 まちあるきマップ
3	松江市 枕木山		枕木山には弁慶堂と名が付いている大岩があるという。	『島根県口碑伝説集』
4	松江市 長海町	手で掘ったので今は井戸の跡は無い。	【水神】土人の屋敷の中にあり、松を神木となし罔象女命をまつる、祭神九月二十八日なり、古老伝云此水神を弁慶森といへり、森の中に小井あり、今にいたりて水たゆることなし、西塔武藏坊弁慶産たりし時は水を産手洗となす、杵田明神は弁慶か産神の社なる故に弁慶か願書なりとて今に社内に籠りてあり、其詞に弁慶か母鉄を食して出生したる子なれば、尋常の子にあらずとて手にて井を掘てうふ湯とせり、其井に鉄を入る事なかれと書たるは此井の事なり、今も井の中へ鉄の道具を入れは其まゝ消失といへり、此水にて癪落なんといひつたふ傍に弁慶か母の墓あり、	『雲陽誌』卷一島根郡 長海
5	松江市 長海町	長見神社正面の右手にある。アスファルト舗装されているのは千酌へ続く新道。千酌へ続く旧道は立石の背後。	生まれた時、弁慶は母の胎内に十三か月もいて髪はすでに肩まで伸び、歯も生え揃っていた。小さい頃から体はとても大きく力持ちで、五歳のときには高さ二メートルの巨石を、軽々と持ち運んだ。その巨石は弁慶の森の入り口付近の畑のなかに、今でも置いてある。	海と山に抱かれた本庄 まちあるきマップ

10	9	8	7	6
松江市野原町、中海の水	松江市野原町、弁慶島の岸部	松江市野原町	松江市長海町	松江市長海町
弁慶が枕木山で修行中、枕木山から大山に向かつて投げた大きな石が野原に落ちたと伝えられ、ぼたもち岩とよばれる。その大石は、今も野原地区の岸辺にある。	(弁慶島・亀島から)脱出する時、岸辺にはえていた茅を握って「エイッ」と陸へとび移った。その握った茅がねじれ、その後もねじれてはえるので「弁慶のねじれ茅」とよぶようになった。または「弁慶の握り茅」ともいって、茅を握ったとき手を切ったので、茅の切り口は弁慶の血で染まり今も赤いと伝えられている。	元々は私有地で、島内には山口さんが住んでいた。現在も大阪府に住む山口さんの子孫の方が所有する。私有地で上陸禁止である。山口さんは対岸から小舟で島に渡っていたが船ごと流されたので小道が付けられた。山口さんの為に作られた小道が現在も残る。島内には南北朝時代の宝篋印塔がある。島を横から見ると亀にみえることから元々は亀島と言った。弁吉の供養塔を弁慶が建てた。		元々は古墳であった(弁慶森古墳)。弁慶の大石付近に急な石段の入り口がある。
		【弁慶島】陸より五十間ばかり沖にあり、古老伝て云、昔武蔵坊弁慶幼児あく党の生付たるにより、此島へ放やりけり、されとも弁慶尋常の童にあらされは、袂に小石を入運て陸への道を作、つゝに人里にかへりぬ、島より陸への小石の道筋今にのこりてあり、是故に俚民弁慶島といふなり、此島に弁慶二親のために建たる石塔なりとて、六地藏を彫付たり、陸への道廿五間ばかりの切所あり、是を飛渡たりといふ、	【杵田大明神】瓊々杵尊を祭、本社一間半に二間、南向、拝殿二間、梁四間、祭礼九月十九日七座の神事あり、小児花笠を着て笛太鼓にて躍規式なり、古老伝に源義経家臣西塔武蔵坊弁慶が産神なり、	弁慶の森は、今なおうつそうとした木立で覆われ、今にも弁慶が現れるような雰囲気包まれている。入り口から少し登ると小さな広場があり、中央に弁吉の碑が建っている。弁吉は紀州の生まれだが、縁あって長見の里に来て弁慶を生んだという。近くに産湯の井戸もある。
二〇一六年七月聞き取り	二〇一六年七月聞き取り	『雲陽誌』卷一島根郡野原	『雲陽誌』卷一島根郡長海	海と山に抱かれた本庄まちあるきマップ

14	13	12	11
松江市 東出雲町	松江市新 庄町大谷 鍛冶床、 『雲陽誌』 には小谷 とあるが 大谷が正 しい（津 森氏の御 教示によ る）	松江市本 庄町熊野 神社の近 く	松江市 本庄町
	元々、津森氏が所有する鍛冶床古墳群の山中にあった。津森氏は代々庄屋で地元の名士である。一九六三年四月から開始された中海干拓事業により現在地、鍛冶床古墳群の麓に移転。現在も鍛冶床古墳群は津森氏所有（私有地）で立ち入り禁止となっている。鍛冶床古墳群周辺に刀鍛冶が多くいる。鍛冶屋は時代が新しくなるにつれ野鍛冶が増えた。山中は松茸山であった。石碑の背後には室町時代の石（五輪塔）がある。移転に伴い石（五輪塔）も現在地に並ぶ。墓周辺の地名を鍛冶床と言った。金くそ・砂鉄はくらみ神社の金くそ遺跡から出た。本庄町には鍛冶屋小路という地名がある。新庄町には鍛冶屋小路という屋号がある。雲陽誌には小谷とあるが、津森氏によると大谷とのこと。鍛冶床で金くそはでない。	ある日弁吉は、弁慶が歩き出さないようにと、大きな石うすに麻なわで弁慶をくくりつけて畑仕事に出かけた。すると、しばらくして子どもの声があるので母が振り向くと、弁慶が石うすを引っぱってきつい坂道をにこにこことやってくるではないか。母はもうびつくりしてしまい、「まあ、まあ」というばかりであった。村の人たちは、それからこの坂を「越えた坂」と呼ぶようになった。	
清山家の地内に、弁慶岩と牛若岩という大小の岩があった。弁慶と牛若が力比べをして野呂と越後谷との間を投げ合ったと伝え、どちらの大岩にもその手の跡が残っていたという。	【鍛冶床】小谷なり、古老のいへるは西塔弁慶此谷にて定恒といふ鍛冶に太刀をうたせり、三年三月にうち仕舞たりといふ、さもありたきにや、今に此谷にかなくすあり、		【立岩】高さ十三間まはり十五間ほどあり、里老のいへるは西塔弁慶が立石なりといふ、此石の所より谷の尾に飛石なりといひて四あり、各二三間ほどあり石の間十五間ばかり、
『出雲町誌』	『雲陽誌』卷一島根郡 新庄	二〇一六年七月聞き取り	『雲陽誌』卷一島根郡 本庄

17	16	15
出雲市 鰐淵寺	出雲市 鰐淵寺	松江市 大根島
いつのことか知らんけど、わしらが聞いた範囲ではね、吊鐘、ああ、大きさはいくらあかいね。今鰐淵寺にああぶんではね、伯耆の大山寺、お寺があるでしよ。伯耆の大山登ると。その鰐淵寺のお寺の、銘が入ってるわね。名前が。大山寺の、同じ天台宗ですけんね。あそこは、で、大山寺の名前が入ってるそう、鰐淵寺はね。から伯耆の大山寺にあるお寺はあの吊鐘は、その鰐淵寺の名前が入ってる。わしもその字までは知りませんけどね。それを昔の人は、弁慶がね、ま、弁慶て言わあどんな人がこら、いろいろな伝説がああでしようけど、その弁慶が、一晩のうちにね、大山寺にあったものを鰐淵寺に持って来てへから鰐淵寺のものをあそこにもって行きたという。そんなばかなことがあるはずない。今考えるとね、だけどその位の豪力だったか力持ちだったかねえ。それでその一晩のうちにかえたということで、まっ、かた手にちようちん、かたえは吊鐘で、「鐘にちようちんつりあわぬ。」てて言おったわけた。結婚でもすうときにね、あまり親方と貧乏人とはね、そんな、それで今の大山寺の銘じやないらしい。あの、あつどこだ、倉吉か、あれからちよつと入ったとこのお寺の銘が入ちようふうですわ。鰐淵寺の鐘がね。（話者明治四十年生まれ吉田栄吉氏、明治三十九年生まれ吉田直吉氏、聞き手赤堀氏・池田氏・森山氏、昭和五十五年八月十九日収録）	弁慶は八雲村の熊野権現の別当弁斎の長男であったが、父の業をつぐのを嫌がり鰐淵寺本領に入ったという。本領の坊数は四十八で、食事の時鐘声を以て角坊に報すと、弁慶はこの合図をきくや四十八坊をまわって一椀ずつ汁をもらったという。当地方の童謡の「弁慶皿持って来い汁吸はしよ」はこれからはじまったという。また、大字別所に弁慶の叔父で鍛冶屋を営む人がいて、弁慶は薙刀を注文した。叔父は三年かけて鉄丸も両断できるものをつくりあげた。弁慶は叔父がほかにも注文があれば同じ物をつくるといったので、叔父を殺し京都に逃げ、牛若丸に仕えたという。鰐淵寺には、負櫃一、鋸一、自画像と根本堂の後には弁慶水がある。	弁慶作と伝えられる「出雲四十二浦之垢離取歌」が伝わっている。
『島根半島漁村民話集 I』（島根大学教育学部国語研究室、島根大学昔話研究会編集発行、一九八一年六月刊）	『島根県口碑伝説集』	「山陰の弁慶伝説」（島中弘、安来市教育委員会編集発行、一九九三年三月刊）

18	19	20	21
出雲市 鰐淵寺	出雲市 鰐淵寺	出雲市 大杜町 遙堪	出雲市 (『出雲国 風土記』頭 注による と出雲市 南端にあ った周囲 三十五里 余の湖。斐 伊川と神 戸川が注 ぎ入り日 本海に通 じていた。 神西湖が 遺跡。とあ る)
【鰐淵寺】本堂の傍に井あり昔西塔武藏坊辨慶島根郡摩添山に うまれ、異人の教を受けて稚時より此山へのほり、終に髪を剃り 瑜伽の密水に結し井なりとて辨慶水とも手習水共いへり、辨慶 か縁にや源義經より當寺の衆徒中への状あり、辨慶か自筆な り、此書は毛利輝元所望し給ひ佐世石見守か取次したりし状あ り、今は是を證據とす、	(山中鹿之助は)天文十四年乙巳八月十五日、雲州鰐淵山の麓、 武藏坊弁慶が育ちたる屋敷に生れ、一月越えて歩み、二月過ぎ て食し、八歳にして敵を討ちしかば、時の人呼んで今弁慶と恐 れを作(な)す、	簸川郡遙堪村大字上遙堪の上矢尾境に接する所に石臼と云ふ 所がある。此所に大きい臼状の石が二個ある。何時の時代のも のか不明であるが、伝へ云ふ所に依れば、弁慶が鰐淵寺の鐘と 伯耆大山寺の鐘と取替へに行く時鰐淵寺出発袂に入れ、遙堪峠 を越え、石臼(地名)に到った時、同所に置いたものであると、 此石は七八十貫の重量があつて、二箇重ね合すことは容易に出 来ず、力自慢の荒者等がしばしば之を重ね合せんとするも誰も 成功したものがない。(小川校長報)	【神門の湖】神門の海水は周三十五里七十四歩裡に鯰魚(なよ し)鎮仁(ちに)鮒(ふな)須々枳(すずき)玄礪(かき)有と記せり 今神在の湖と云是也大杜の南二里余りにあり毛利元就当国発 向の時此神在の城も破り給ふ弁慶が硯今は里の通路の橋とな りぬ弁慶は古今の勇者の人の普く知れる事也ふとおもひ出で 綴りぬ
『雲陽誌』卷九楯縫郡 別所	『後太平記』下巻の卷 第四〇「山中鹿之助品 川狼助勝負之事」	『島根県口碑伝説集』 (大正七年)昭和二年 に収集)	『懷橘談』下

30	29	28	27	26	25	24	23	22
安来市西 松井出雲 路幸神社	安来市西 松井出雲 路幸神社	安来市 清水寺	出雲市	出雲市	出雲市	出雲市 矢尾町	出雲市 高岡町	出雲市 小境町 一畑寺
弁慶長じて出雲路幸神社参詣の時足踏をしたという岩がある。岩は社前の庭の砂中に一角を表している。	紀州熊野庄司の娘弁吉女当社に縁結びを祈り良縁を得て一子武蔵坊弁慶を挙げた。弁慶成長して、当社に賽したことがあったという文書がある。又境内に弁慶腰掛岩という岩石がある。	弁慶はある日清水寺へ手紙を届けに行ったが、一息で清水寺の坂を登ったので「一息坂」といい、庭の桜を退屈まぎれに振じったので「弁慶のねじり桜」という。	弁慶石といって、西村の山頂から弁慶が投石したものである。ゆえにこの名がついている。	上来原の岩樋の山に弁慶の足跡というのがある。平らな岩に大男の足型がついており、その傍に小さい子供の足型もあって、これは牛若丸の足跡だといっていた。	【波岩】樋の上此岩あり、傍に牛若石弁慶石とて巨岩あり、来歴分明ならず、	【来成天皇】来成天皇本社の頭をはなたかといふ。高山なり、本社へのほる坂路をかうといふ。是則神門と書なり、傍に巨岩あり信太森と号す、里民弁慶岩ともいひつたふ由来いまだ詳ず。	【多福寺】護摩堂一字鎮守稻荷社あり、傍に一石あり高さ六尺ばかり、土俗伝云武蔵坊弁慶此石を携来て茲に置と、	【弁慶か立石】仁王門の下にあり、西塔弁慶幼稚の時当山へ参籠して此石を立置たりといふ、碁盤のことくなり土より上へ出たること一問四方ほとあり、
『島根県能義郡飯梨村誌』	『飯梨郷土史』『飯梨郷土史編纂委員会編纂、飯梨公民館発行、一九九四年九月刊』	「山陰の弁慶伝説」(島中弘、安来市教育委員会編集発行、一九九三年三月刊)	『名勝史蹟及天然記念物』	『出雲隠岐の伝説』	『雲陽誌』卷之十神門郡石塚	『雲陽誌』卷十神門郡矢尾	『雲陽誌』卷十神門郡高岡	『雲陽誌』卷九楯縫郡小境

37	36	35	34	33	32	31
仁多郡 湯村	江津市	江津市	邑智郡 桜江町	大田市	大原郡 大東町	安来市西 松井出雲 路幸神社
【硯水】萬歳山に凹たる岩あり、里俗此水を武蔵坊弁慶か硯水といふ、早魃の時岩を洗水をかへ雫すれば雨かならず降とならん、	武蔵坊弁慶が力試しに投げたという巨岩が砥谷城跡の山続きの松の木の根元にあり、投石の際についたといわれる指跡が黒く四分くらいの深さについている。	弁慶が修行中波積を通りかかり、中井手のそばの大岩を持ち上げ、山頂めがけて投げ上げた。その時、あまり力を入れたので、大岩には指の跡がくっきりとついたという。弁慶力試しの岩は、波積本郷中城氏宅の裏山山頂にある。	千丈溪の一の滝附近に弁慶が手をつっこんだという弁慶の穴がある。右手には弁慶の足跡といわれているものがある。	江谷川の支流に木履滝といつて三十尺の滝がある。その附近の岩の一面に木履の齒の跡に似た印刻がある。弁慶の木履の跡と伝えられている。	牛若丸、弁慶石がある。古老の伝えによると、元暦の頃源義経と弁慶が競技をしたが、弁慶の技は義経に遠く及ばなかったという。弁慶は怒りの余り鉄槌をもって岩を打ち、今もその痕が残っている。村人が弁慶岩を切つて使つたらば怪異があつたため、恐れてその岩に八寸余の地藏尊を刻んで祭つた（ママ）ら止んだという。	出雲跡幸神社境内に弁慶足踏石がある。弁慶が御礼参りに来た時残して置いたと伝えている。
『雲陽誌』卷之五仁多郡湯村	『はづみ誌』	『波積のさと』	『桜江町誌』	『島根県口碑伝説集』	『島根県口碑伝説集』	『島根県口碑伝説集』